カモカモ（鴨々）について
―コトからモノへの関心―

研究エッセイ

菊池　勇夫（COE共同研究員／宮城学院女子大学・教授）

1 玄米をはかるカモカモ

松浦武四郎の蝦夷地踏査日誌に記された和人のアイヌに対する「非分」の事例を読み直していたとき、『竹四郎廻浦日記』下にある次の記述が目にとまった。

①先達て詰合細野某此辺を見廻りし時も、番人共のアツシ一反を小のかもかも〔一升六合入〕一杯にて玄米と取かへしを、近頃其カモカモの小になりし事を〔当時一升二合ならで入らざるよし〕大に怒りて、土人共中々立行難き由を細野某へ歎願致し、同人の前にて番人を大に言込めしとかや〔細野某話し〕。（安政3・1856年8月29日条）。

また、次のようにも記す。

②扨其クナシリえ引とられて支配人等が所置は中々聞も忍びがたし。其一二をしるし置ば、シヤリ・アハシリ両場所にて、夷人共よりアツシを織て持行、是を運上屋また番屋にて易る時は玄米を小きカモカモ〔一升二合位〕に一杯にてかゆるよし。其アツシをクナシリへ廻し置て此方の土人共島にてアツシを無心する時は正銭六百文づゝの勘定になる（と）かや。（安政3年9月1日条）。

以前から知っている箇所であったが、カモカモとはどんなモノなのか気になりだした。玄米をはかる枡のような用途の器物であるのは察しがつくが、皆目わからない。コトを論ずるにはさしあたり必要がないから、ふつうならモノに立ち止まらず前に進む。文字史料を素材に研究しているとそのような習性がおのずと身についてしまうのだろう。コトのきびしいやりとりがモノを媒介になされていることに無頓着でいられないと思ったのは、本プロジェクトの「非文字資料」の研究に加えていただいたおかげかもしれない。

少し史料の状況説明をしておこう。①で武四郎に話してくれた細野某はモンベツ（紋別）御用所に詰める幕府同心細野五左衛門のことである。支配人・番人の横暴は許さないという考えの持主だったようだ。オホーツク沿岸地域およびクナシリ島は藤野喜兵衛の請負場所で、②にあるようにアバシリ・シャリのアイヌをクナシリ島へ派遣して働かせており、それがアイヌ社会の疲弊の原因となっていた。ここではアットゥシ（樹皮衣）と玄米との交換が問題になっているが、オホーツク沿岸地域はアイヌ女性によるアットゥシの生産がさかんなところだった。手間隙がかかるアットゥシの製作でありながら安く買い上げられ、その結果商人がいかに不当な利益をあげていたかが告発されている。

武四郎は安政4年ナイフト（名寄）に泊ったさいにも、「アツシ一反」を織って運上屋に持っていくと、「小きカモカモに米一杯」と交換してくれたことを記している（『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』下）。ただし、この場合には1杯といっても玄米3升5合であったというから、モンベツなどよりはいくぶんよかった。いずれにしてもカモカモをひそかに小さいものにして相手を騙し交換を有利にしようという手口は、シャクシャインの蜂起にいたった、1俵の容量をどんどん減じて8升にしてきた歴史を思い起こさせるものがある。それに気付き抗議しても無理・非道が罷り通ってきた現実は重たい。

2 近世史料からわかるカモカモ

寛政4年（1792）のソウヤ場所御救交易に同行した串原正峯の「夷諺俗話」に、「鴨々　カモカモといふは曲ものにて、黒く又は赤く塗り、夷用に仕込み、出羽の坂田にて造る　にアツシ（アイヌ語）」とある記述が簡潔だが、要点が知られる（『日本庶民生活史料集成』第四巻）。補注者（高倉新一郎）は、カモカモについて「かも。檜、杉などの薄板を円形にわげ、合せ目を樺または桜の皮で綴ぢ合せた容器。わげもの。アイヌが水・酒などを運ぶのに珍重して求めた」と説明している。

曲物であることを裏付けるものにアイヌ語資料がある。

蝦夷通詞であった上原熊次郎の「藻汐草」（寛政4年跋文）、および「蝦夷語箋」（嘉永7・1854年新刻）には「曲物の食籠」のことをアイヌ語でカモカモというのだとしている。また能登屋円吉撰になる「蝦夷語集録」（文久4・1864年）には、「曲物形物」の和語に対応させている。食籠（じきろう）とあるから、食物を入れる容器として使われたのが本来の用途なのかもしれない。「形物」は一定の様式のものを意味しているだろうから、カモカモといえばすぐにその形状が浮かんだであろう。

黒塗り・赤塗りについては、玉虫左太夫の『入北記』（安政4年）にホロベツ領のアイヌへの「売払物直段調」が載っているが、そこに黒のカモカモが380文、赤のカモカモが340文と出てくる。漆塗りでも黒塗りのほうが少し高かったことがわかる。

アイヌ向けの製品であるという点はよいとして、生産地を酒田としている点はどうであろうか。『蝦夷志料』五十四に「高橋三平筆記」を出典とする「諸国御仕入物」が掲載されている。高橋三平（重賢）は前期幕領期最期の松前奉行である。蝦夷地向けの品物を書上げたもののようであるが、酒田の箇所に「かもかも壱組三拾四文五分」とあって、酒田が直接の生産地とはいえないまでも仕入れの港であったのは確かである。酒田や最上川流域の史料を探せば何か手掛かりが得られるかもしれない。

文字史料的に比較的よくわかるのはカモカモの売り値段である。アイヌ交易品の値段付けの史料は少なからず残っているが、前出の『入北記』が各場所の値段付けをよく調べて書いている。その一部を紹介しておくと、〔イシカリ〕2つ入り1組＝夷俵1俵、〔ルヽルモツベ〕2つ組＝煙草6把、〔西トンナイ、カラフト〕1組揃＝2俵、大＝煙草4把、中＝同2把半、小＝同1把半、〔シヤリ〕3つ合組＝米一俵、〔ネモロ〕3つ組（合カ）1組＝448文、大＝164文、中＝154文、下＝130文、〔ウラカワ〕3つ子入1組＝550文、〔ユウフツ〕2つ入1組＝500文、〔シラヲイ〕1つ＝300文、などとなっている。玄米1升の値段は1升56文のところが多いが、60文、80文のところもある。

カモカモの値段の他に、大・小の二つ組のものと、大・中・小の3つ組のものとがあり、その1組の値段と、ばら1つの値段が示されているのは、そのどちらでも売られていたからだろう。このように各場所の交易品として出てくるから、アイヌ社会への普及度が高かっただろう。上下ヨイチ場所の万延元年（1860）の仕込品の書上げに、「鴨々五十組」とあるから、かなりの数量にのぼったことは確かである（『余市町史』第1巻）。

3 絵のなかのカモカモ

それでは、近世後期のアイヌの生活文化を描いた絵画・図像資料にこのカモカモを見出すことができるだろうか。探しているうちに、松浦武四郎の「蝦夷漫画」（安政6年刊）・「蝦夷訓蒙図彙」にカモカモの図が載っているのがわかった。本プロジェクトの生活絵引きの作業をすすめていくさいに、こうした説明（名称）入りの図会・図説の類は大きな手助けとなるだろう。前者の図によると、黒塗り、円筒形で蓋があり、手に提げて持てるように紐がついている。隣に描かれている柾桶（マサシントク）に比べるとかなり小ぶりである。『松浦武四郎紀行集』下の口絵に復刻されているので御覧いただきたい。また後者は『松浦武四郎選集』二に収められているが、「四升を入る也。是に二はゐとして一俵と云り。惣而勘定是を以て定む」との説明が付いている。前述のようにカモカモには1升6合入、1升2合入、3升5合入のものがあったが、この４升入が大であろうか。その2杯分が「夷俵」（造米とも）1俵となれば計量にも都合がよかったはずである。

このように、カモカモの形状がわかれば、あとは絵画・図像資料にひろくあたって探すことができる。たとえば木村巴江「熊送の図」、同「祭礼之図」、川端玉章「アイヌ大漁祈願ノ図」、平沢屏山「炊事の図」「神祈り図」（谷本一之『アイヌ絵を聴く』、図録『アイヌの四季と生活』）などに、人物の側に置かれさりげなく描かれている。塗りのないものや緑塗りのものもあったようだ。

カモカモの名称について『日本国語大辞典』第二版は「米穀をはかるための、一斗を容量とする桶のかたちをした枡。斗桶」と説明している。出典の「俚言集覧」（1797頃）には「東国に此桶の名をかもかもといふ」と記されている。この斗桶とアイヌ社会のカモカモはどのようにつながっているのだろうか。

実は菅江真澄もカモカモの絵と文を残していた。それについて舟山直治氏が考察を加えている（「近世中期の北海道における桶の形態と利用」（『北海道開拓記念館調査報告』35、1996年）。カモカモは取手や紐のついた桶のことで、酒や水を入れるのに使い、アイヌ語でニヤトス（小桧桶）といい、東北地方に類似の曲物のあることなどが指摘されている。女性との関わりも深そうだ。武四郎の計量具としてのカモカモの用途は真澄などには出てこない。さらなる調べを必要としている。